

ラオスの農業と植物防疫事情

法政大学生命科学部

多々良 明夫 (たたら あきお)

はじめに

2015年6月29日に4度目のラオスの土を踏んだ。今回は長期滞在である。JICAのシニアボランティアとして、ラオスの首都ビエンチャン近郊にある国立植物防疫センター（Plant Protection Center 以下 PPC）で8か月間害虫の仕事を行った。PPCの要請事項は所蔵標本の整理と害虫同定に関する指導助言であった。ラオスは東にベトナム、南にカンボジアとタイ、西にミャンマー、北に中国と国境を接する東南アジア唯一の内陸国である（図-1）。面積は日本の3分の2、そこに650万人（2015年）が住む人口密度の低い国だ。国土の約70%を森林が占める山の国だが、メコン川をタイなどの国境に抱く河の国でもある。共産党政権になってから51年、一人当たりのGDPは1,589ドル（2013年）と低くアジアの最貧国と呼ばれてきたが、ここ10年の経済成長率は8%前後で推移し、リーマンショックで周辺諸国が経済成長率を激減させたときでもそれを維持した。ヨーロッパを中心とした観光客も増加し、経済成長と併せて今やラオスは変貌しつつある。しかし、日本ではラオスに行くと言っても国の場所さえ知らない人が多い。恐らく日本では東南アジアの中で最も知られていない国ではないだろうか。そこで農業や植物防疫に関して私が見聞きしたことを紹介したい。

I ラオスの農業

2015年の統計ではラオスはGDPの22%を農業が占めている（日本は1.2%）。2005年には45%であったが、これは農業生産が少なくなったからではなく、近年の経



図-1 ラオス全国

済発展に伴い特に商工業のGDPに占める割合が高くなったためである。農業生産も4%前後の成長率を維持しており、農業は依然としてラオスの重要産業として位置づけられている。商工業は大都市に集中しているため農業に従事している人の割合は2010年の統計で75%を占め、2005年の76%とほとんど変わっていない。耕地面積は135万ha、耕地面積の72%がイネで最大の農産物である。ラオスは近隣の国と異なり、主食はもち米で、うるち米も食するが栽培はもち米が圧倒的に多くコメ生産の85%を占めている。かつてラオスに派遣された海外青年協力隊がイネの4期作も可能なことを明らかにしたが、灌漑施設が整備されていないため、雨季の1作だ